
~DESTINYブレイド~

龍馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～DESTINYブレイド～

【著者名】

龍馬

【あらすじ】

相反する二人の少年。相反する二つの組織。相反する一人の能力。自分の心が産み出した怪物により特殊な力“ability”を与えた少年達の物語り。

第一話～一人の少年～（前書き）

この物語りは、基本的にはバトル物のです。
小説初心者故に大変おかしな所もあるでしょうが、是非温かく見守
つて下さい。

第一話～一人の少年～

→ DESTINYブレイド→

世界を壊したいと願い、人間を呪つて いる少年 “秋草 弥彦”
秋草 弥彦 アキグサ ヤヒコ

この世界が大好きで、守りたいと思つて いる “高橋 太四郎”
高橋 太四郎 タカハシ タシロウ

大半する一人だが、何故か二人は大親友だつた。……今日までは

……

「……今日の授業何？」

地元の高校に通う17歳少年、弥彦が横にいる茶髪の少年に話かける。

「え～と……体育と音楽と……あとは忘れた」

茶髪の少年がそれに答え、黒髪の少年に言つ。彼も地元の高校に通う17歳の少年だ。

「そか……」

（聞くだけ無駄だつたか）と言いたげに、答える黒髪の少年弥彦。
「何だよ？怒つてるのか？」

「怒つて無い」

冷たく言い放つ弥彦……彼はこいつ性格なのだ……

「絶対怒つてるってえ～」

それに大半し、茶髪の少年太四郎は明るく気さくな性格だ。どう見ても普通の高校生の通学だ……あと十分も歩けば、学校に着くであろう……

第一話～黒い天使～

暫く歩いた学校に着いた……

暫く学校で勉強した学校が終わった。

いつもと同じ日常……漫画だつたらここで天使が下りてきて、自分に特別な魔法をくれるのに……

弥彦は学校が終わり、オレンジ色の空の中、一人帰宅に向かつていた。……太四郎とは、クラスが違い、太四郎は部活をしているので、帰りは別だ。

「はあ……まだ、四時か……本屋にでも行こうかな？」

独り言を呟き、帰宅の道からそれる。

……たゞして面白くも無い漫画を二時間程読みふける……三時間

を200円で売つたと思つと少し損な気がする。

今度は真っ直ぐ帰宅しようとする弥彦……しかし、弥彦は何かの気配に気が付いた。……つけられてる様な、気配に……

気付かれ無いように速や歩きをし、相手をまくよつて、細い路地に入れる。

すると……

「秋草 弥彦だな？」

先回りされていた……黒いスーツにサングラス……そして二メートル近くある身長の男が四人……その中の一人が低い声で、弥彦に尋ねる。

「……違いますよ」

弥彦は意外と冷静に、ハツキリと答えた。手をゆっくりと学校の鞄に忍ばせる。

「やめたまえ……」こちらは既に君の事を調べ上げている」

弥彦に尋ねた男が残念そうな顔をして首を横に振る。他の三人は胸の内ポケットに手を入れている。“あれ”が出て来そうだ。

「……なんですか？ 貴方達は？」

嘘がバレても至つて冷静に……嘘をついた事を無かつた事の様に、言ひ。

弥彦はまだ知らない……彼等が弥彦の元に下り立つた黒い天使だと
いう事を……

第三話～黒と白のパート～

「で、なんですか？」

大男を睨みつけながら弥彦が言つ。

「我々は君に何も言えない。だが君にはついてきて貰う」
クソ……丁寧な言い方だが、結局はただの誘拐だ……やられた……
ハハハッ寄り道なんてしないで、さっさと帰つてれば良かつた。
そしたら今頃家でテレビでも見てたんだろうな。母さん「ゴメン！」

「分かりました。ついて行きますよ！」

観念した弥彦は大男達に囲まれ、そのまま車に乗せられた……
その頃、部活の終わつた太四郎にも何かが起きていた。

「高橋太四郎君だね？君についてきて貰いたい」
弥彦を連れていった黒服の大男達と同じ事を言う数人の男達が、
部活帰りの太四郎の前に現れた。

「あいにく……知らない人にはついて行くなつて言われるので」

太四郎は強氣で言い返した。

「フフフ……君は正しいよ。私達も手荒な真似はしたく無い。だが
がね、今回だけはそもそも行かないんでね！」

男達の一人が太四郎に向かつて右手を突き出した。その瞬間……
何がが呑んだ。そんな気がした。

気付けば太四郎はその場に倒れていた。

「優しく連れていけ」

男の内の一人が命令し、他の男達が、太四郎を近くに止めていた車へと乗せる。

弥彦と太四郎の身に同時に起きた事件、全く同じ内容の……ただ一つ違うのは……弥彦を連れて行つた男達が黒いコートを来ていたのに対し、太四郎を連れて行つたのが、白いコートを来ていた事……それだけだ。

しかしこれが……この違いが後に世界を崩壊させる程の事件になると、この時はまだ……二人の男しか知らなかつた。

第二話～黒い皿のパート～（後書き）

非常に更新遅れてしまい、申し訳ありませんでした……

中にはメールをくれて、間違いを指摘して下さる方までいて……

こんな小説でも読んで下さった方がいて、とても嬉しいです。

しばらく更新出来て無かつたのですが、春休みに入ったので、最低一回一話更新していきたいと思います。

意見、感想等もお待ちしています。 m(—)m

第四話～忘れ無い名前～

「つきました」

俺は今、黒コートの奴らに連れてこられて、どっかの地下らしき場所に連れてこられている。

「さあ、降りて下さい」

誘拐した癖に敬語？意味が分からぬ。なんだコイツら

「ついて来て下さい」

俺は奴らの指示に全て従つた。
で、今はこんな所だ……

当たりは真つ暗で、何も見えない、大きな部屋。さつきまでいた黒コートの奴らもいない。一人にされてしまったのだ。正面に大きな椅子がある。しかしこの椅子……なんて趣味してるんだ？気持ち悪い……無駄に背もたれが大きく、その大きな背もたれには人の顔のような物が飛び出している。

俺がその椅子に見とれていると、声がかかつた。

「お前が秋草弥彦……いや、ディアボロスか」

「へ？」

どこからだ？少し見回した。

……声の主発見。

椅子に座つてた。

「ククク……本当にまだ子供のようだ」

椅子に座つてゐる野は静かに口を開く。その声は、結構高かつた。

「フフフ……これでやつと“ビプロイツ”と決着がつけられる」

男は椅子から立ち上がりた。そしてその瞬間、弥彦の目の前に立つていた。

「うわあっ

普通に驚く。

「コイツいつの間に……そういえば、椅子の時も最初は居なかつた様な……見えなかつただけか？」

「やう驚くな……俺とお前は仲間や」

何言つてんだコイツ？

「短刀直入に言おう、壊つたらしいのは嫌いだ。……我々と世界を壊さないか？」

おいおい「コイツ……直入しすぎだ……しかも意味が分からぬ。だが……俺はその時男の、キレ目を見てしまつた。そして何となく分かつてしまつた。コイツが本氣であることを……良く分からぬけど、前から思つてた事だ。この男に言つてみよ

う。

「俺は……この世界を壊したい！」

ハツキリと…… そういった。

「…………… そ、うか」

俺の答えを聞いたその瞬間、男は一イッと口を開き吊りし、不気味な笑みを浮かべた。そして

「ならば田覚めろ！」

男は右手を突き出した。

「う、ぐうあ！」

痛い！頭が割れる。何しゃがった？死ぬのか……

俺の意思が薄れ行く中、男は笑つたままいつ言つた。

「俺の名は“シユドウ”覚えとけ……クククまあ忘れられないだろうがな」

俺はそのまま意識を失つた。でも多分、この男の名前は忘れられないだろう。

…………… シユドウ

第四話～忘れ無い名前～（後書き）

ついあえず第四話書きをおした。

ちなみにこの小説は、弥彦の視点からと、第三者の視点からがゴッチャになる小説なので、読み辛いかも知れませんが、どうかご了承下さいm()m

第五話～弥彦と子猫～

「あら、何を言つてゐるの？貴方は学校が終わつて直ぐに帰つて来たじゃない」
「あら、何を言つてゐるの？貴方は学校が終わつて直ぐに帰つて来た
じゃない」
「あら、何を言つてゐるの？貴方は学校が終わつて直ぐに帰つて来た
じゃない」

でもそれは嘘だ。本当に学校が終わつて直ぐに帰つて来てたなら、財布から200百円減つてる事の説明がつかない、200百円が無のは、俺が学校帰りに漫画喫茶に寄つたからなんだから。——
体なんなんだ……あの、シユドウで奴は……

と、そんな事を考えていると母さんから……

「ねえ弥彦～今日の夕飯カレーライスにしようと思つてたんだけど、ルーを買つて忘れちゃつたから、買いに行つてくれない？」

はあ？なんでメインディッシュの材料を買い忘れるんだ？全くこの親は……でもまあ、少し外に出て気分転換でもするか？

「分かつた。行つてくるよ」

「ありがとう。でも近所のスーパー“馬鹿売れ”は駄目よ、高いから。三丁目のスーパー“激安”に行つて来てね」

おいおい……三丁目は結構遠いぞ……それに値段だつて25円しか変わらないのに……文句言つても仕方ないか。

弥彦は服を着替え、母親から250円ジャストを貰い、母から見送られ、徒步でスーパー激安に向かつた。

「て、やっぱ結構遠いよなあ～こんな時に限つてチャリパクられるとは……ん、あれは！？」

弥彦は何かを発見した。それは……数人の学生らしき者が、建物と建物の間の狭い場所で、まだ小さな子猫に向かつて工アガソを放つているところだった。

「なんて事を……」

今直ぐににでも止めたい。だが、自分が何をしようと、あの学生達を止められ無いことは分かっていた。自分もボコボコにされ、猫も助からないだろう。と決めつけ、行動に移せ無い。弥彦は自分のこういう所が大嫌いだった。そして、自分より弱い物に当たり散らす人間の情け無い所も……大嫌いだった。

弥彦は何も見なかつた事にして、スーパーへ向かつ。腹の中に黒い何かが溜まる感覚がする。弥彦はこうこう場面に出くわすと必ず、こうなるのだ……そして、あの時助けていればと後悔する。

ハツ、とんだ馬鹿野郎だな……秋草弥彦……お前はキングオブチキンだよハハハツ

……自分で自分を罵る。こうする事でしかこの気持ちを沈められないのだ。

弥彦は普通に買い物を終え、帰路に着いた。途中、子猫の事が気になり、子猫の居た場所に行つてみた。

「良かつた……生きてた」
猫は生きていた。だが身体中怪我だらけで、一部の毛が、抜けて
いて、片目が潰れていた。

「酷い事するな……ゴメン、ゴメンよ……」

弥彦は涙を流しながら猫を抱き締めた。

第五話～弥彦と半猫～（後書き）

ふう～とりあえず第五話です。

この話で、弥彦が人間を嫌いな理由なんかを少しだけ書けました。

そろそろバトルも行われます。

ちなみに、自分は一話書くたびに、後書きを書きます。
小説のついでに後書きもよろしくお願いします（笑）

第六話～無敵の破壊神～

弥彦が抱き締めると、子猫は今にも消えそうな声で鳴く。弥彦には、痛い、助けて、酷いよ！と猫が言つてゐるよつた気がした。

「『メン』……本当に……俺、見てたのに助けてあげられなくて」

猫はグッタリとしている……潰れた片目から血が流れだし、弥彦の服に付着する。

その時、後ろに何か気配を感じた。

直ぐ様後ろに振り向くと……そこには白いコートを着た男達が四人、弥彦を睨みつけていた。

なんだ？ コイツら……あのシユドウで人の仲間か？ 白いけど……

すると、白いコートを着た男の一人が口を開いた。

「秋草弥彦……ディアボロスが覚醒する前に、死んでもらうー！」

はあ？ いきなり何を言つてるんだコイツらは。 そういえばシユドウも俺の事をディアボロスとか言つてたな……一体なんなんだ？

「悪く思つた、世界のためだ」

そう言つと、白いコートを着た男達の袖から、長いカギヅメの様な武器が出てきた。そして

「殺れ」

リーダー格の男が言つた瞬間、三人同時に弥彦に飛びかかる。

「う、うおお！」

とつさに子猫を床に寝かし、弥彦は走つて逃げ出す。

「あいつら、イカレテる」

細い路地を突つ走り、少し広い場所に出た。しかし、絶望的な事に、そこは行き止まり……

「や、ヤバイ」

白いコートを着た男達が追いついて來た。

「観念しろ……貴様は危険過ぎる。この世界で生きていくにはな男の一人が弥彦に話した。

「何か勘違いしてませんか？自慢じゃないけど、俺、相当弱いですよ」

何情けない事を言つてゐんだ俺は？

「危険なのは貴様ではない、ディアボロスだ！」

そう言つと一人の男が超人的飛躍力で、宙に舞、そして弥彦に向かつて急降下した。

「あつ・ぶ・ない！」

弥彦はギリギリの所で、後ろに飛んで助かつてゐた。

「クッかわされた！だが」

男はカギヅメを振り回し、弥彦に迫る。

「うわわ

再び弥彦は後ろに下がって、爪を回避する。……しかし、ついに後ろに壁が来てしまった。

「マジか……俺はこんな所で意味分からぬ奴らに殺されて終わるのかよ

ああ……なんて不毛な人生なんだ。俺は一体何のために生まれたんだ？理由も無く殺されるためかよ……

ああもう駄目だ……どうでも良い事考えてしまつ。

『汝……いつまで寝ているつもりだ？

汝が死ぬのは許されん
汝の命を書き消す者は、
我が爪を持つて、消滅さす！』

あれ、何だお前？何処から話かけてる？

『我が力を持つものよ、見せてやる、我が力を！
神の力を！』

なんだよ……一体。

次の瞬間、血がまるで噴水の様に吹き出した。

「な、馬鹿な……」

驚いているのは白コートの男達……吹き出した血の持ち主は、白コートの男の一人だ。

「ディアボロス！まだ覚醒していない筈だ！？」なのに……」

リーダー格の男は驚きを隠せない。

『虫ケラ』とき貴様らが、我に刃を向けた事……後悔させてやるつけだ。弥彦が男達に言った。いや、正確には弥彦の口から声が出ただけだ。

喋っているのは、弥彦では無い何か……

『我が名は“ディアボロス”唯一無一の、絶対的破壊の存在だ』

その瞬間、弥彦が目にも止まらぬ高速で移動、そして、三人の白コートの前に一瞬で現れた。

「なにい！？速いつ

白コートの一人は焦りながらも、カギヅメを掲げ、弥彦に振り下ろした。だが、

『貴様らが遅い』

弥彦は不適な笑みを浮かべ、カギヅメより速く、右腕で男の頭を掴んだ。

「ぐ、ぐああ

そして、なんと弥彦の腕が伸び、男をそのまま壁に叩きつける。建物のコンクリートが何枚も割れる轟音が響く。

「ぐわあああ……！」

そして最後に絶叫が響いた。

弥彦の右腕は既に人の物では無く、悪魔、鬼、怪物、そういった

類の醜い腕へと変化していた。

そして伸ばした腕を、引き戻す。男は持つておらず、手には血だけが残っている。

頭を握り潰したのだ。

『次は貴様だ』

弥彦の目がギョロっと動き、別の男を睨んだ。

「ひ、ヒイツ」

男は力ギツメを振り回し、カギツメを弥彦の右腕に当たったが……当てた“だけ”だった。

高い金属音が響き渡り、カギツメは弾かれた。

『我が無敵の肉体に、傷はつけられん！』

弥彦は右腕の鋭い爪を男の心臓部に突き刺した。

男は声も挙げずに力無く弥彦の腕に貫かれたままになった。

『グワハハハ……戦い、久しづりだ。

もつと我を楽しませよ！』

貫いている男を放り飛ばし、最後のリーダー格の男を見た。

『ディアボロス……やはり恐ろしい力だ』

男の声は震えている……

『消え失せろ』弥彦は右腕を男に向けた、そして呟く『デイストーション』

その瞬間、急速に右腕に膨大なエネルギーが収束し、暴力的な閃光が解き放たれた。

激しい爆音と共に、リーダー格の男、そしてその後ろの建物は全て光に呑まれた。

第六話～無敵の破壊神～（後書き）

まず始めに第六話を読んで下さり、誠にありがとうございます。

m () m

ふう～今回やつとの話の最も重要な人物？ディアボロス様が出て参りました。

彼？はめちゃくちゃ強いです。んでもってめちゃくちゃ危険です。

今回の話で、強い所は分かつて貰えたかな？自分の書き方が未熟で、戦闘はイマイチだったかもしれませんね……もっとスピード感が出したい。

ま、とりあえず、今後の展開に期待して下さい。では～

第七話～組織、ability、仲間～

「あれは、俺か？どうなってる……」

弥彦の目には、自分の形をした怪物が、あの白コートを相手に戦つてる姿が映つている。

『汝、聞こえるか？

我が名はデイアボロス

我が名はデイアボロス

我が名はデイアボ……』

煩い、煩い……何だお前は、一体……

弥彦は頭の中が混乱する。 一体デイアボロスとはなんなのか？ 自分はどうなつていいのか？ 突如言い伝え様の無い恐怖が弥彦を襲う。 こんな恐怖……今まで弥彦は受けた事が無い。

そして次の瞬間、弥彦は驚愕する『消滅せよ、デイストーション』

全てを滅ぼす悪魔の光が弥彦の拳底から放たれた。

それは自分を襲つた白コートを呑み込み、更にそれだけではなくまらず、周りの建物も一緒に吹き飛ばした。

結果、弥彦の突き出された右手より前方に存在していた全ての物質は消滅した。

『まだ力が戻っていないな……長い間眠り過ぎたか』

最後にアイツは、デイアボロスは、俺の中でそう呟いて……それ

から……俺の意識はぶつとんだ。

「ククク、やはりティアボロスの力、凄まじい……だが、この威力は少々危険過ぎるな……使いこなせないので困る」

その言葉で俺は目が覚めた。

「なんの事ですか？ シュドウ、さん」

一応、本人の前では敬語使うかな……年上だし。

「気付いたか？」

シュドウは特徴的な口を引き吊らす笑みを浮かべ、ベッドに寝ている弥彦に言った。

「そういうえば、『ヒーリー』……じゃないっ！！ シュドウ、さん、何か知ってるんでしょ、アイシィ……ティアボロスを……」「珍しく熱くなる弥彦、シュドウはまた口を引き吊らせ笑い、弥彦に話す。

「ククク、まあティアボロスが目覚めた事だし。お前は逃げられ無いだろうから、教えてやるか」

シュドウは笑いながら言った。弥彦は真剣にそんなシュドウを見つめる。

「長くなるぜ、忘れないように良く聞けよ」

「忘れませんよ。シュドウさんの名前だって、覚えてるじゃ無いですか」

「ククク、そうだったな、じゃ聞けよ」

「そう言つてシユドウさんは、話始めた。俺はこの話“も”決して忘れないだろ？……

「まずは、俺達の事を少し説明してやるかな」

「あの黒コート達の事ですね」

「そうだ、奴らは“リヤクドウ”で組織の者だ。んで、驚ろくなよ……なんとそのボスが俺なんだ！」

弥彦は大して驚か無い、そんな事はなんとなく分かつていたから。

「リアクション薄いな……まあいい、で次にお前を襲つた白コート共……奴らが“ビプロイツ”俺達の宿敵だ」

「ええと、なんで宿敵なんですか？」

弥彦が疑問を浮かべる。シユドウはそれに軽快に答えた。

「それは……俺達が世界を壊そつとしていて、ビプロイツが世界を守ろうとしてるからだ」

「なんですか？」

弥彦は無邪気に聞いた。シユドウは……

「なんで？ 答えられねえよ」

ハハハ……良く考えりやそうかもな……理由なんて人それぞれだ。

「じゃ、なんで俺がその……ビプロイツに襲われたんですか？」

「そいつは簡単……お前がディアボロスを持つてるから襲つて来たんだ」

更にシユドウは言葉を続けた。「んで、また襲つて来るぞ。

お前がディアボロスを持つてる限り」

「ええ！？」

「冗談じゃない！なんで俺がそんな危険な目に会わなきゃならないんだ！？」

「デイアボロスを持つてるから」

「……シユドウさん、貴方、心でも読めるんですか？」

「別に、ただお前がそんな顔をしてたから」

「まあいい、続きを」

「はい……」

「まあ奴らがお前を……デイアボロスを狙う理由は簡単だ。それは危険だから……ただそれだけ」

そんなの納得出来るか！！

「デイアボロスはどうやって捨てるんですか！？いりませんよ、こんな危険な物」

「捨てる？冗談じゃない、折角現れたデイアボロスを……それに捨てるなんて事出来ないしな」

なんだとぉ！？何ふざけた事を……

「そうだな……じゃ、次は“ability”について教えてやるか」

「あびりてい？」

「abilityてのはお前のデイアボロスとかの事だ」

待てよ……何かひつかかる。 そう、“とか”だ。

「待つて下さい。 もしかして、俺みたいなのは他にもいるんですか？」

「ああ八人いる。俺達リヤクドウ側に四人。ビプロイツ側に四人だ」

「……はあ、なんか頭こんがらがつて来ましたよ」

「ちなみに、俺達リヤクドウは今一人abilityを持つものを発見した」

「俺を合わせて？」

「そう、お前ともう一人だ。ビプロイツの方は既に三人集まってるようだな」

シュドウは、話がそれた。と言つて別の話しだした。

「abilityてのはその名の通り、能力だ。ディアボロスもその一種さ、だが、他のabilityと違い規模が大きすぎる所以外はな」

「はあ……もう駄目だ。これは漫畫か何かかな？ リヤクドウ？ ビプロイツ？ ability？」

いい加減にしてくれ！もう頭が痛い……

「すいません……少し寝かせて貰えますか？頭がこんがらがつて来て……」

シュドウはまた笑つて答えた。

「ああ、そうだな。流石に信じられないだろうし……まずは寝ろ」

「そうします……お休み」

弥彦は布団を被つた。そしてシュドウは静かに部屋去つて行つた。

第七話～組織、ability、仲間～（後書き）

ふう疲れた。とりあえず第七話です。

この話で、世界感を少し出したいなと思っていたんですが、読み直してみたら、思ったより駄目駄目でしたね……

とりあえず、仲間四人で敵も四人なんだ。
て事だけ分かつて貰えたら嬉しいです。

それとこの小説～DESTINYブレイド～の読者数が100人
突破しました。これからもどうぞよろしくお願いいたしますm(—
ー) m

第八話 ルー無しカレー

シュドウが去った後、弥彦はあるものに気が付いた。それは

「あれ、テレビあんじやん」

弥彦のいる部屋は、窓が一つも無く、小さな電球だけが、部屋を照らしていた。

「そういえば……今何時だ？」

ふと思いつた疑問。

確かに……母さんにお使い頼まれたのが7時ジャストだったよな。んで、まあ色々あって……今何時だ？てか今日何日だ？

「そうだ」

弥彦はおもむろにテレビのボタンを押した。

電球だけで照らされていた部屋が、また少し明るくなつた。一度つけたチャンネルでは、ニュースがやっていたので、日付を確認出来る。

「ええ、と早く日付出ないかな……」

弥彦がテレビを凝視していると、念願の日付が画面に映り出された。

「うああああ！なんて事だ」

弥彦が驚いた理由は……そり、日付が既に次の日に移り変わっていたからだ。

「ヤバイ、流石に母さんも心配してるだろ?」

と、そんな事言つてる場合じやない。早く帰らないと

弥彦はベッドから跳ね起き、横に置いてあったカレーのルーも、ついでに持ち、部屋のドアノブへ手をかけた。その時

弥彦の耳に、気になるニュースが流れた。

「ええ～ 昨夜8：30頃、東京都金井沢三丁目で起きた爆破テロと思われる事件ですが、新たな事が判明されました。

警察の調べに寄りますと、爆破に使われた爆弾が従来の爆弾とは比較にならない危険性があるとの事です。

爆破されて箇所を調べてみると、なんと、破壊されたのでは無く、ただしくは、その部分だけが“消滅”したと言つた方が正しいのだとか……」

弥彦はその後の話は聞かなかつた、が、明らかに犯人は自分である事は明白だつた。

ショックはでかい。なんせ、その当たり一帯がまるでクレーターの様になつていたのだから……自分にそんな力があると思うと、底知れぬ恐怖に襲われる。

だが、恐怖を降りきりテレビを消して、ドアを開けた。

ドアを開けたら直ぐに長い廊下だつた。壁には所々落書きがされていて、一寸先は闇といった感じの場所だつた。幽霊が出て来るぞうだ……恐れを成した弥彦は走つて階段を二階ほど駆け降りた。そしてついに出口が見つかる。

出て納得。そこは廃墟と化した病院だつた。恐い訳だ……

「ショウジョウさん、なんて所に連れて来ててくれたんだ」
しかし外に出てみればまだ朝だった。 気分を入れ換えて、弥彦は走つて自宅に向かう。

見たことの無い廃虚だったが、意外と近場だつたらしく、直ぐに見慣れた場所に出た。

「ふう、安心安心……これなら直ぐに帰れそうだ」

その通り、直ぐに自宅は発見出来た。

急いで家に向かう弥彦……しかし、あることに気付いた。

流石に一日帰つて」なきや心配してゐるかもな……もしかしたら警察に電話なんて事も……ヤバイ、ビリじょわ。

「ま、まあいいか」

弥彦は自宅のインター ホンを鳴らした。 すると家のなかから聞き慣れた

「ハア～イ」

といづ声が聞こえる。

「あら、弥彦!？」

「ただいま……ごめん、色々あつてさ」

何か言われる前に先に謝る。 これは弥彦の得意技だ。

すると母は……

「あら、朝帰りなんて、貴方も“やるわね”」

弥彦の母、美恵子は笑いながら言った。

「ち、違うつつのー！」

「あら、でも顔赤いわよ、まさか本当に～」

やめよ！……からかわれてるんだ。相手にしたら負けだ……

「まあそんな事より、何してたのよ！貴方のせいで私は一人寂しくルー無しカレーを食べたのよ……」

そこか？たつた一人の息子が一日帰つて来なかつたのに……

え？何かひつかかるつて？ そうか、『一人寂しく』てとか。
OK説明しよう。俺の父さんは小さい頃から出張ばかり……それも海外、で、いつも家にいないんだ。最後にあつたのは10年前かな。だから母さんは女で一人で、俺をここまで育てくれたつて訳さ

「ああ、とりあえず説教は後にしといてよ、お腹減つてんだ」とりあえず話を変えとくか。

「ああ、丁度食べ物あるわよ
「本当！？じゃ、早くしてよ
「分かったわ、弥彦は手でも洗つてなさい
「おつけ」

よつし見事に、回避したぜ。じゃ、あつたかいご飯に、ありつくとするかな。

手を洗い、速足で台所に向かった弥彦。……………そこには

「ハイ、ルー無しカレーよ。沢山食べていいからね」

そう、そこに出でられたのは昨日のルー無しカレーだった。最早
カレーでは無いが…… とりあえず一口……

「…………マジイ」

第八話～ルー無しカレー～（後書き）

ふう～ 実は結構無茶苦茶な設定になってしまった第八話です。

僕の未熟さが良く出ていますね……

とりあえず今はちやくちやくと伏線を張り巡らせてます。 いつか回収されるのを楽しみにしていて下さい。

では～

第九話～赤い転校生～（前書き）

突然ですが、小説家になろうの、エラーで、中途半端な所で終わってしまった第九話を書き換えました。

是非、もう一度第九話を朗読願います m(—)m

ゞ迷惑おかげして誠に申し訳ありません。

第九話～赤い転校生～

さあて、清々しい朝だ。太陽はギラギラと輝き、セミは大事なパートナーを見つけるために、懸命に鳴く。ちよつと五月蠅が、俺は好きさ

「弥彦、そろそろ学校いきなさい」

下から母の声が聞こえる。弥彦の部屋は一階なのだ。

「分かつてるよ」

弥彦は制服に着替え、リズミカルに階段を跳ね降りた。

「じゃ、行つてきます」

「朝ご飯はあ？」

「いらぬ」

そう言って、母の返信は聞かず、弥彦は外に飛び出した。

弥彦の向かう場所、そこは……待ち合わせ場所。 そう弥彦が唯一親友と呼べる男、高橋太四郎との……

「に、しても遅いな……あの太四郎が待ち合わせに遅刻なんて」

そんな事を思っていたが、10分待つても太四郎は来なかつた。
仕方なく、弥彦は一人で学校に向かう。

たく……太四郎の奴、家は金持ちなのに、なんで携帯持つて無いんだよ。て、これじゃ俺が学校に遅刻しちまつ、走るか

全速で走る！走る！走る！ 学校の門が見えた。 タイムリミットまで後1分……間に合つか！？ 頼むぜ俺の足。

ヤバイ、駄目だ。もう間に合わない。 校門の前には、金井沢高校名物“山中 大輔”が居る。 そして門を閉めようとしている。ちっくしょお！…これ以上遅刻したら単位が…

学校の時計の針が、8：40分を指し、登校時間に終わりを告げた。

門は既に山中により閉められている。
間に合ったのか？

「おお、秋草。 ギリギリだな」

え、何だつて？ギリギリ？ ……て、事は

「間に合ったのか！？」

気迫のある顔つきで山中先生を見つめ、俺は言った。

「ああ、セーフだ。 さつさと教室へ行け」

山中先生は穏やかに言った。

アッハハ、ラッキーだ。 後ろを向けば、ほら、遅刻した生徒達が山中に頭を下げているよ。 爽快だ。
に、しても……俺、足速くなつたな。 50mを6秒くらいで走りきつたかな？ 今まで9秒くらいかかるってたのに……ま、いつか。折角間に合つたんだ。 早く教室へ行こう。

教室に着いたら、とりあえず寝たふりで一日やり過げ！す……友達がいないと寂しいもんだな。

に、しても、今日はやけに騒がしいな……何の用だ?

と、その時、教室のドアが勢い良くスライドし、担任の先生が入つて来た。

「ええ～今日はホームルームの前に、話がある」

クラスの皆が、待つてました。と言わんばかりに、視線を先生に浴びせた。今日はこのクラスに……転入生が来くる!」

歳をとったベテランの先生が、自分なりに盛り上げようと間を開けたみたいだが、それは無駄だ。何故なら、既に皆のボルテージはマックスだから……

まあ、俺は興味無いよ。女でも男でも……

「じゃ、入つて来なさい」

担任の先生がそう言つと、再びドアがスライドした。

そしてドアから入つて來たのは……

真っ赤に染められた頭髪。そして髪と同じように真っ赤な瞳。と、いう明らかに不良少年だった。

「じゃあ、自己紹介して」

良く見ると、先生の額からは汗が、しみ出でている。

赤髪の転入生は軽く椅子に座る生徒達を睨みつけ、それから血口紹介をした。

「相羽 葉月……よろしく」

ガンを飛ばし、強気に言い放つた。

「ねえねえ、葉月君カッコ良くなない？」

「え～でもちよつと怖くない？」

「ヤレ」が良いんだよ～

女子達が騒ぎ出す…… 煩いな。

「や、そりだなあ、じゃあ…… 席は弥彦の横が良いんじゃ無いか？」

何い！？何言つてやがる…… こんな危険そうな奴を俺の隣に……！
頼む、今からでも考え方直してくれ……

しかし、弥彦の願いは、叶わず。 葉月の席は弥彦の横に決定した。

葉月が弥彦の横を通ったので…… 弥彦が一応挨拶をする。

「よ、よろしく。 葉月君」

弥彦は手を差し出した。 その瞬間、バチーン！ と音が響いた。
教室中の誰もが何が起つたのか！？ と、目を見張った。

「いっつあーーー！」

「ケツ」

葉月は弥彦の手を思いつきり弾いたのだ。

「て……あ、ヤレヤレ、『メンソーナ』」

あれ？俺悪く無いよな？ なんで謝つてんの？

葉月は一斉に集まつた視線を物ともせず、足を組み堂々と自分の席に座つた。

「じゃ、じゃあ皆仲良くするんだぞ」

そう言つて先生は足早に教室を出ていった。

ちょっと待て……仲良く？ 無理に決まってるだろ！

しかし、意外にも、その後の授業は、スムーズに終わっていく……
だが、いつもは騒がしい授業の間の休み時間が、異常に静かだ。
いつもは皆に相手にもされない弥彦だが、この時ばかりは、同情
して貰えていた。

学校にチャイムが鳴り響く。

「はあ～やつと終わつた～」

どうやら学校が終わった様だ。どうせ明日も学校だが、弥彦は
とりあえず一安心。

気になる葉月は先に帰つた様なので、気楽に帰れる。

さあて、帰るか……ん、いや、その前に……

「すいません、高橋太四郎君は今日学校に来ましたか？」

「ああ、たしか高橋は今日休みだつたな

「そうですか……」

唯一の親友の事を、太四郎のクラスの担任に、聞いておいた。

なんだよアイツ……休むなら連絡くらい入れてくれよ。

そんな事を思いながら、下駄箱へ向かう弥彦。

そのまま、帰路に着く。

訳では無く、寄り道をしようと、家までの道とは違う方向へ進む。

あんな事があつたのに、また寄り道なんて、俺も学齢しないな……

弥彦はお氣に入りの本屋（立ち読みOK）へ向かい歩いていた。
すると、あるものを発見。それは……

相羽葉月だ。

「へえ～アイツ家の辺なんだ」
まあ、知ったこっちゃ無い。 あんな気難しい野郎。

だが、

いや、ちょっと気になるな……後をつけろみるか。

何故か葉月の事が気になつた弥彦は、葉月を追跡した。

しかし、直ぐに後悔した……

「あれ？」……

何故か？

「あの時の廃虚病院だ」

それは……

弥彦は物陰に隠れて葉月を凝視していた。

「おこ、隠れて無いで出てこいー。」

「ゲッ、ばれてる……やばい、どうしよう。
しかし、その瞬間、弥彦を襲った白ローブ、“ビプロイツ”が、
突如現れ、葉月を包囲した。

「アイツらは……んで、なんで俺じゃなく、葉月が狙われて
るんだ？」

少し考えた。

答えは直ぐに出た。

「アイツがシユドウ……せん、の言っていた、abilityを持つ、仲間か」

ああ、面倒事に巻き込まれる前に……早く逃げよう。

第九話～赤い転校生～（後書き）

ふう～ 第九話は、色々大変でした。書き換えや、続きを読める
書き方をしたい、と奮闘したりで……

では、評価してくださった方、読者の皆様、続きを楽しみにして
て下さい m(—)m

第十話～ability name dark - connection (前書き)

いきなりすいませんが、第十話を読む前に、書き直しました、
第九話の朗読をお願い、申し上げます。

第十話～ability name dark - connection～

全く……寄り道なんてするから罰が当たつたんだ……
失敗は成功の元？ 馬鹿言つた、失敗は次なる失敗への布石じゃ
ないか……
どうする？ 僕にある選択肢は一つ……

- 1 ,葉月を助けるため、あそこに突っ込む。
- 2 ,葉月を見捨てて逃げる。

よし決めた。 2だ。

なんで俺があんな奴を助けなきやならない？ そもそも俺が行つて助けられる訳がない。

弥彦が情けない事を頭の中で自問自答し、逃げようとした。 その瞬間！！

「うがあつー？」

弥彦の右腕に激痛が走る。

な、なんだ……この痛みは……

弥彦は反射的に、葉月の方を見た。

由「一トに囲まれていて、良く見えないが……なんと葉月も腕を、抑えている。

なんだ？ なんで俺と葉月が……共鳴して痛がつてるんだ？

「ぐあああ……なんだ、この痛みは！？」

葉月は白コートに囲まれ、絶対絶命、と言った状態なのに、それ
に加え、謎の、左腕の激痛……
それを見た白コートは……

「この共鳴反応は、まさか！？」

そう言ってキヨロキヨロと辺りを確認しはじめた。

そして……

「いたぞ！」

アイツは確か……秋草弥彦！ ヤバイ、ディアボロスだ！！

ヤバイ、ばれた。

くつそ……どうしたんだよ右腕。

弥彦の右腕に、まるでもう一つの命が宿ったかの様に、ドクン、
ドクンと、鼓動が刻まれる。

「アイツは……確か隣の席の」
葉月も弥彦に気付いた。その時、葉月は直感的に、この痛みが
弥彦と共鳴しているからだ。と考えた。

「アイツは、まさか……シュドウが言っていた、俺と同じ……」

「どうする？ 一人が相手となると……」「

白コート達が話始めた。

「こちらは30人異常はいる。それにディアボロスは未だ完全覚
醒はしていない。

両方とも仕留めるんだ！」

ゲッ！？アイツら、俺にも向かって来た。チクショウ右腕、早く動け。逃げられないぞ……

「「Jのお！？」 動けえ」

叫んだのは弥彦……では無く、葉月だ。 叫び声と共に、左腕を突き上げた。

「痛みが、消えた。……よっしゃあー！」

葉月の叫びで、弥彦に向かつた白コードも、動きを止め、葉月を見た。

お、俺も痛みが消えた。 よし、今の内に逃げよう。

弥彦は隙をついて逃げようとした。 しかし……

弥彦に向おうとしていた白コードが、再び弥彦に突撃。 とてもじゃないが、逃げられそうでは無い。

「うわああ、馬鹿！ 「J」ちに来るなよー！」

そこで再び弥彦の中で一択が生まれた。

- 1 - 頑張って一人で逃げてみる。
 - 2 - 葉月は戦える雰囲気なので、葉月に助けてもらひ。
- どっちが安全か？ そりや、一人や一人……助けてくれえー葉月くくん。

弥彦は向かつて来た白コード四人に、自ら突撃。

「世界のために、消えろ、ディアボロス！」

白コート四人の手から同時にカギツメが飛び出した。

「う、うおお」

弥彦は雄叫びを上げ、突撃。白コートのカギツメが、弥彦に迫る。

「ぐらえ！」

白コートにむけて、いつの間にか握っていた砂をぶち撒けた。

「ぐわつ」

不意の一撃に白コート達の動きが止まる。

その隙に男達の間をくぐり抜け、葉月の所へ走った。

「アイツ、なんでこっちに来やがる！？」

葉月は煙たがる様に言った。と、その瞬間、自分にも危険が迫つている事に気付いた。

白コートがカギツメを振り上げ、自分に襲いかかつて來ていたのだ。

しかし葉月は余裕の表情を浮かべ、

「いいぜえ、かかつて來い」

楽しそうに笑い……

「出番だぜ……」

貫け、ダークナイト！

再び叫び、左腕を突き出した！ 突き出した左腕の前方には……

カギツメを振り上げた白コートの男がいる。

そして次の瞬間、葉月の左腕は自分に襲いかかつた白コートの男

を、貫いていた。

「行くぜダークナイト、こいつらをぶっ倒す」

葉月は貫いていた白コートを、前方に放り投げ、前にいた白コートに当てる。

投げつけられた白コートは、体制を崩し、後ろに後退りした。その隙を突き、葉月は左腕を突き出し、貫く。

葉月の腕は、“あの時”の弥彦の様に、人のものとは違う、何かに変形していた。

しかし、弥彦のものとも同じでは無い。

葉月の左腕は先端が尖った、槍の様な形をしている。

「はああ！！」

前方の男を、排除し、そこから脱出する葉月。

囮まれてままでは分が悪いので、一旦脱出するのは正解だ。

「ダークナイト……世界のために、消えろ！」

白コートが一斉に襲いかかる。

「雑魚共があ……ぶつ、殺す！」

葉月は、武器と化した左腕を構え、白コートの軍勢と対峙した。

「うわあ、何やつてるんだアイツ、あんなに大勢……これじゃどうちも危険じゃねえか。葉月に助けを求めようとした弥彦は、葉月の無謀な行動に絶望した。

後ろを見ると、砂をかけて怯ませた四人の白コートも、自分に向かって来ている。

ヤバイ、もうダメだ。……終わった。最近ヤバイ事ばっかりで、ヤバイが口癖になつてゐる……

突如その場で動かなくなる弥彦……

弥彦は無駄な事が嫌いだ。これ以上何をやつても無駄という事に気付き、生きる事を諦めたのだ。

「消えろ！ ディアボロス」

白コートの一人が、弥彦にカギツメを突き刺そうとする。

カギツメが突き刺さる　　その時、弥彦の頭に声が聞こえた。

『汝、何をしている？　目覚めよ

我が名はディアボロス。

唯一無二の絶対的破壊の存在。

我が名はディアボロス

目覚めよ、我が主、秋草弥彦！』

また、これが……

そう頭の中で呑いた瞬間、弥彦の意識は消えた。そして……

「ぐはああ！！！」

カギツメが突き刺さる寸前、弥彦が白コートの頭を掴んだ。その右腕は……もはや人の物では無かつた。

「くつ、離せ！」

白コートの男は、必死に逃れようと、もがいた。

弥彦は静かに口を開いた。

『 我を消すだと? 』

『 我を誰だと思っている。 』

『 我が名は、ディアボロス! 』

『 弥彦……いや、弥彦の体を借りたディアボロスが、不気味に言った。 』

『 その貧弱な力で、我に歯向かおうなど…… 愚の骨頂だ! 』

ディアボロスが言った、次の瞬間、まるで花火のように血が飛び散った。 弥彦の右腕は血で真っ赤に染まっている。

そして白コートの男は地面に倒れた。

その白コートの死体に、頭は無かつた。

「くつ、ディアボロスめ……」

残り三人の白コートが、怯えながらもジリジリとディアボロスに近づく。

『 何をしても無駄だ、我に牙を向けた事を悔い、消滅せよ 』

ディアボロスは、足をバネのように曲げ、そしてその反動で、高く飛び上がった。

『 まずは…… 』 ディアボロスは空中で三人の中から狙いを付け、『 貴様だ! 』

右腕を伸ばし、ターゲットとなつた男の頭を掴み、そのまま地面に叩きつけた。

「ぐおおー。 」

地面に頭を叩き付けられた、白コートの男は、泡を吹き、血を流している。

男の周辺の地面が、大きく凹んでいる事から、その一撃の重さが、感じ取れる。

ディアボロスはそのまま別の男に、落下的勢いを乗せた蹴りを加える。

「ぐはっ」

蹴りを喰らった男は吹き飛び、地面に伏せる。

『ククク、最後だ、消えろ』

ディアボロスは、最後に残った白コートの男を睨み、地面に叩き付けた男を、振り回した。

そして、最後に残った白コートの男に、叩き付ける。

それでバランスを崩した白コートの男に、伸びた右腕を突き刺した。

白コートの男は血を吐きながら、その場に倒れた。

ディアボロスは伸ばした右腕を戻し、首のある方向へ向けた。

それは……

「なんだ、アイツ……結構やるじゃないか。チツ、いつちは流石に、この数じやきついぜ。不本意だが……」

お前、いつちを手伝え!』

葉月が戦っている場所。

「おい、早く、手伝……」

『ククク、虫ケラ共が……まとめて吹き飛ばしてくれる』

ディアボロスは右腕を、葉月が戦てる所へと向けた。

ディアボロスの右腕に、膨大なエネルギーが集まつて行く。

「な、おい……お前

『消滅せよ、デイストーシヨン』

右腕から放たれた、膨大なエネルギーは、全てを消滅させる悪魔の光として、一直線に狙った方向へ進行した。

「馬鹿野郎！俺まで巻き添えにする気かよ！？」

葉月の叫びも虚しく、消滅の光は進路を曲げる事無く突き進む……

第十話～ability name dark - connect～（後書き）

ふ～、第十話です。

本当は葉月の活躍する話だったのですが、イマイチ葉月田立つてませんね。

それよりナイトのスペルあつてるんでしようか？

何しろ学が無いもので……

まあ、良いか。 ではまた十一話で会いましょう（笑）

第十一話 消滅の神VS闇の騎士

消滅の光は、進路をも削り取りながら、一直線に突き進んだ。

「なに、考えるんだよ！！あいつあ

葉月が驚きを隠せない表情で硬直している。

葉月と戦っている三十人ほどの白コート達も、焦り、急いで回避行動に移る。

光は、葉月達がいた空間を呑み込み、そのまま後ろに控えていた、廃虚病院をも吹き飛ばした。

『ククク…まだ、生き残りがいるか』
ディアボロスは辺りを見回し言った。周囲は煙に包まれていて、視界は非常に悪い。

「つの

煙から何がが飛び出した。

「馬鹿野郎！俺まで殺す氣か！？」

葉月だ。葉月は、右腕で弥彦の襟首を掴み上げ、宙に浮かせ、武器と化した左腕を、弥彦の頬に近付けた。

「学校で手を叩いたのは悪かつたけど……お前はやり過ぎだ！！」
葉月は怒りをあらわにして、弥彦を怒鳴りつける。

『貴公は……ダークナイトか。

貴様の様な、道を外れ落ちぶれた騎士が、我に牙を向けるとは……

『何事だ！』

「なつ　お前、……一体」

『貴公も消してくれる…』

ディアボロスは、足を大きく振り上げ、そして葉月を蹴り跳ばす。

「ぐはっ」

葉月は地面を擦りながら吹き飛び、数十メートル飛ばされてから、止まった。

「の、野郎お……俺を怒らせたな」

葉月は立ち上がり、左腕を構えた。

『面白い、歯向かつかダークナイト』

『死ねえ！！』

地面を蹴り加速、左腕を突きだし弥彦を串刺しにしようとする。

『貴公の攻撃など、避ける必要すら無い』

ディアボロスは右腕を差し出し、葉月を迎撃つ。

「なめるなあ！！」

一気に撃ち出された突きは、ディアボロスの右腕に当たった。だが、高い金属音が響き渡り……ディアボロスの右腕は無傷。

スは左腕でパンチを繰り出す。

「な……に」

『消える』

自分の攻撃が効かず、動搖し、動きを止めた葉月に、ディアボロ

「つづ」

葉月は間一髪、右腕でパンチを受け止めた。しかし

「ぬあつ！」

再び衝撃により吹き飛ばされる。

「つとお……どうなつてんだ。abilityは右腕だろ……なんで普通のパンチでこんなに吹き飛ぶんだ」

葉月は見事着地し、疑問を浮かべた。

それもそのはず。通常、abilityは体の一部が変形して武器となるもの。

そして武器となつた部分には、そのabilityによる様々な……その名の通り、“能力”を得ることが出来るのだ。

しかし、それはabilityの部分だけ……葉月であれば槍となつた左腕“だけ”に能力が宿る様に……

つまり、生身の部分で、あれほどの攻撃力を生み出したのは、不思議でしかないのだ。

弥彦の体はどう見ても、先程の一撃を繰り出せるとは思え無い程、細く、貧弱なのだから……

「ダークナイト……“あれ”をやあつ」

弥彦はポツリと左腕に話かけた。

それに呼応するかのように、葉月の左腕は、赤く、燃え上がり、炎を身に纏つた。

その炎は葉月の髪と、皿と、同じ赤色だ。

「俺を怒らせた罰だ。……燃え尽きろ！……」

葉月は燃え上がつた左腕を突きだし、猪の如く弥彦めがけて突進。

『愚かな……そのような攻撃は無駄だと、何故気付かぬ』

ディアボロスは右腕を葉月に向けた。そして『ディストーシヨン』

あの破壊の光を発射した。

「ヒツのおー！」

葉月は捨て身のつもりで、弥彦の心臓をめがけ槍を伸ばした。しかし、その一撃を避けたディアボロスは、ディストーシヨンの狙いをずらした。

消滅の光は空を切り、空に浮かぶ雲を切り裂いた。

『くう、まだ不完全か……そろそろ中に戻され……』

突如ディアボロスの体が動かなくなる。それを見た葉月が、

「貰つたあ！」

飛び上がり、心臓をめがけて槍を突き出す。

『この体に傷はつけられない……』

ディアボロスは最後に右腕を盾にして、葉月の攻撃を防ぐ。燃える葉月の槍は、硬質な金属よりも硬いであろうディアボロスの右腕を貫き、燃やし、切断した。

ん、おお、やっと意識が戻って来た。一体、俺はどうなった？
生きてるのか？

「これで終わりだああー！」

葉月が槍を弥彦に突き刺そうとしている。
て、おいチヨットオオ！なんだこりやあ！　起きてそつそつ、殺
されそうだー！

「たつたつ……ターアーム！」
んな事言つて止まる訳ないか……俺、死んだ。

「え？」

葉月の動きが止まつた。

止まつてくれたあああ！！

「えと、あの……」

弥彦は目を涙ぐませながら……

「ありがとおう！」

葉月に礼を言つてしまつた。葉月は、突然の豹変ぶりに、口を開け呆然としてしまつた。

第十一話「消滅の神VS闇の騎士」（後書き）

今回はもう少しあと長く書きたかったのですが、色々あって少し短くしました。

ん~なんか同じ表現の使い過ぎが、少しテンポを悪くしてひみつな気がします……

第十一話 質疑の応答

「お前……なんのつもりだ？」
葉月が声を低くして言った。

「なんのつもりも、なにも……俺、今まで氣を失つてたんだけど」
と、弥彦の田に、ある光景が飛び込んで来た。
それは、半分崩壊してしまつてゐる廃虚病院。そして、廃虚病院
までの地面。

「！」
「これは……」

弥彦は、その光景
を見て驚愕してこる。その姿からはとてもとぼけてる様には見えない。

「イツ、覚えていないのか？

「あれ、葉月……君? がやつたの?」
一応君付けで、弥彦は葉月に質問する。
すると葉月は

「お前が、やつたんだよ！……覚えてないのか…？」
怒氣を含んだ声で、弥彦に答えた。

「……やつぱり。 また俺か」

「やつぱりやあ」

葉月が何かに気付いた。

「三一田の、テロ事件と言わっていた、あれは……お前だったのか
！？」

「ああ……そうだよ。今みたく白コートの奴らに襲われてさ、で意識を失つて、気付いたら、こんな風になつてるんだ」
「意識を失う、か。おかしいな……俺はabilityを解放しても、意識を失つた事なんて一度も無いぞ」

弥彦が、

「え？」

と口を開けた瞬間。

葉月が突如横に吹き飛んだ。

「ぐふうつっ！…！」

「葉月！…君」

弥彦は素早く、横を振り向いた。

そこには、ボロボロの白コートをはおつた、二メートル以上はある巨大な男が、立っていた。

「く、」

弥彦はとつさに右腕を構えてみた。

「て、うわああああ！…！」

と、いきなり絶叫。

右腕がねええ！…

今頃右腕が無いことに気付いた弥彦。そんな弥彦に葉月が声をかけた。

「大丈夫だ！右腕はお前の ability…直ぐに再生する…！…今は逃げる」

葉月は、地面に伏せ、横腹を抑えながら叫んだ。弥彦はとりあえず、巨大な白コートから距離とる。

白ゴートは、何故か動かない。

「葉月、君……大丈夫？」

「肋骨が折れてるな……だが、少ししたら回復するはずだ。 a b
ilityの部分では無いからちょいと時間はかかるけどな、それ
と……“君”はいらない」

「うおおっ！」

弥彦が驚いた顔で、声を上げる。

理由は……弥彦の右腕がいきなり再生したからだ。

「おいおい、俺もう人間じゃ無いのか？ 切れた部分が勝手に生え
てくるなんて……てか何で右腕無くなったんだ？」

「ま、まあそれは置いとけ」

葉月が焦つた様子で、言った。

「まあ、いいや。 それより、どうあるの、これから
「勿論、あの『テカブツ』をぶつ殺してやるぞ」

随分血の多い奴だな……だから髪が赤いのか？

その時、

「ドン！」

という音が響き渡り、弥彦と葉月は同時に、ある方向を振り向いた。
そこには、もの凄いスピードで迫り来る、巨大な白ゴートの姿が
あつた。

第十一話～質疑の応答～（後書き）

本当は巨大な白ゴートを倒して終わるつもりでしたが、一応今日は、ここまでにしておきました。

それと昨日更新忘れてましたね……

そしてついに～ DESTINYブレイド～のアクセス数が200人を突破しました。
皆さんこれからもよろしくお願ひいたします。 m(—)m

第十三話／不死身の巨体

「ゲツ、來たぞ」

「お前は逃げろつー俺は動けな……」

巨大な白コートは、両腕から長いカギツメを取り出し、一人に襲いかかる。

「ぐふつ……」

白コートは、葉月を思い切り蹴り飛ばし、そのまま弥彦にカギツメを振り下ろした。

「わあつー！」

しかし、その攻撃をギリギリの所で伏せてかわした。……否、尻餅を付いて避ける事に成功する。

「じょ、冗談じゃねえぞ……」

弥彦は顔をひきつらせ、苦笑いを浮かべる。腰が抜け立てない……

巨大な白コートは、そんな弥彦に情けをとれる姿をみじんも見せず、腰が抜け、動けない弥彦に狙いを定め、再びカギツメを振り下ろす。

今度こそ終わった。……俺の人生がね

が、その瞬間……白コートの男の腹部から何かが勢い良く突き出した。それが何かは、直ぐに分かった。

葉月の左腕の、槍だ。

「はあ～、はあ…おいデカブツ…俺を忘れるなよ」

いくらか体が回復した様子で、葉月はニヤリと嫌味な笑いをした。しかし白コートは、葉月の一撃が全く効いた様子が無く、平然と立っている。

他の白コートの男達と違い、顔面がマスクで覆われていて表情が確認出来ないので、ダメージを与えているのか、確認出来ない。

「なんだデカブツ…お前不死身かよ」

「……目標相羽葉月、ターゲットは…抹殺する!」

ペペペペッという機械の音と共に、白コートは槍を引き抜き、葉月に顔を向けた。

チャンス、今のうちに逃げれるか?

……駄目だ、腰が抜けて歩け無い。我ながらなんて情けないのだ
るわ……

「おらああつ！」

向かってくる白コートに葉月は槍を構え応戦する。
白コートが、両腕のカギツメを振り回し、葉月に怒濤の攻めを開する。

この状況は、武器の性質からして葉月が不利だ。

槍はリーチが長く非常に協力な武器だが、その分小回りがきかない、俊敏な動きをする相手と素早い武器には滅法弱いのだ……

葉月が今戦っているのは、見かけの割に非常に素早く、更に素早い連續攻撃が得意なカギツメを持つ相手という、正に弱点そのものだ……

「うぐぐ…」

最早防ぐだけで手一杯の葉月……この状況、猫の手でも借りたい気分だ。

「くつそお……」

葉月は力ギツメの剣線を見切り、迫る力ギツメを伏せてかわす、そして……

「おらあああっ……」

槍を横に薙払うようにして、白ゴートに叩きつける。

その衝撃で、白ゴートはその巨大を浮かび上がらせる。

そこに葉月が追撃のショルダータックルをお見舞いする。 大した威力は期待出来ないが、空中で攻撃を受け、白ゴートは地面に倒れる。

「ふう……ふう」

葉月は息を整え、そして……

倒れている白ゴートの心臓部分に、槍を突き刺した。

「はあはあ、どうだあ」

「おお、アイツやりやがった。 僕も歩けるようになつたし、めでたしめでた……」

少し距離を置いた所で見ていた弥彦が呑気な事を言つた、その瞬間

……白ゴートのマスクに隠れた目が緑色に光輝き、白ゴートの太い腕が、葉月の槍を掴み、引き抜こうと動き出した。
「な、おいおいマジで不死身かよ」

「ゲッ……まだ終わらないのかよー?」

第十二話～不死身の巨体～（後書き）

久しぶりの更新です。大学が始まりチョット忙しく、これからも更新は不定期になってしまいそうですが……

更新していない時にも、小説を読みに来てくれる方がいるのは、嬉しい反面、チョット罪悪感を感じたりもしました。

それと……もしも機会があればARMSといつ漫画を読んでみる事をオススメします。

DESTINYブレイドのイメージが分かりやすくなる反面、失望しますよ（笑）

第十四話「血の氣」

完全に急所を付いた攻撃を『えたはずなのに、全く効果が見えない敵に葉月は苛立ちを感じる。そして同時に恐怖という不安を葉月に与える。それは近くで見ている弥彦にも同じ事だ。

ヤバイ…多分今までで一番ヤバイ。

基本的に漫画等では量より質が優先されるものだ。（普通なら…質より量であるが）

あの敵は見るからに他のビブロイツの奴より格、実力が上だ。
そして葉月に素早い連續攻撃を仕掛けた事から、移動速度が速い事も分かる。

このままでは逃げる事も出来ずには殺されてしまうかも知れない。

と、葉月はあるものに気が付いた。それは自分がぶち抜いた白コートの左胸部。そこからは火花が飛び散り、様々なケーブルや電球が何かを供給するプラグの様な物が見える。

それを見て葉月は安心した。
不死身では無い と。

「だつたらあ、粉々にぶつけわしてやるだけだろーー！」

葉月が起き上がった白コートの頭に槍を繰り出す。

すると白コートは目を輝かし、カギツメをクロスさせ槍を防いだ。
更に攻撃後に出来た大きな隙を付き、白コートは葉月に蹴りを放つ。

「ぐう…！」

再び葉月は吹き飛ばされる。葉月の顔は痛みで歪んだ、が、その後ニヤリと笑った。

もしかしたら　　と何かが閃いた。

「試してみるか…

やるぜ、ダークナイト」

クスクスと笑いながら葉月は左腕に話かけた。　その瞬間、槍に炎が宿る。　そして、地を蹴り一気に白コートへ突撃する。

「大体決まってるよなあ、不死身のキャラってのは…」

突撃しながら葉月は挑発するように白コートに言いつ。

「弱点があるつ、てのがなあ…！　　んでつ」

葉月は更に続ける。

「大抵弱点はあ…頭だよなあ！　　おい…！」

叫び終わり、葉月は大きく飛び上がる。

そして、頭に向けて槍を振り下ろす。

「燃えるおーー！」

白コートは葉月を冷静に見つめ、カギツメをクロスさせる。先程と同じように攻撃を防ぎ、カウンターを与えるつもりだ。

「馬鹿が、同じ手を何度も繰り返すかよおーー！」

燃える炎の槍は一直線に、目標を遮るカギツメへと向かう。

槍は……カギツメと激突する。　しかし、弾かれる事は無かつた、槍に宿る炎はカギツメに乗り移り、一瞬にして溶かし水の様なドロツとした物質に変化させた。　そして……槍は白コートの男は捉えた。

第十四話～血の氣～（後書き）

ふう～今日はタイトル考えるのに凄く時間がかかりました。
て、事で全く関係無いタイトルになってしまいました。……では
また、

第十五話～プロローグ終結～（前書き）

もの凄く久々の更新です。なんか書き方を忘れてしまい変な感じになつてしましましたが、これから調子を取り戻していくつもります！

第十五話～プロローグ終結～

物質を形成する原子。全ての物質は原子が集まり形成される。

葉月の槍が敵を頭から貫いている。

原子の単位から燃やす事が出来る炎……それは形状を保つ事を許さず、触れた物を液体に変える。

つまり防御不能。これが葉月のability、ダークナイトの能力だ。しかし葉月自身もまだabilityが目覚めてから一ヶ月程度で扱い方が不安定なため、この“原子焼失”的炎を使うのに非常に体力を使うため連発は出来ない。

今日はこれで一度目、白コートを液体に変えたのを確認し、葉月は体力の消費を抑えるために、abilityを戻した。葉月の左腕は、人間の物に戻っている。

「おい！」

少し休憩を入れてから葉月は地べたに座りながら、すかさず弥彦に声をかける。

「お前さつきはどういうつもりだつたんだ？」

「どういうつもり？ ああ、俺に聞かれてねえ……」

「いや、何が？」

「何が？ ジヤねえ！ 俺に襲いかかつて来た事だよー！」

「そうだ、聞かなきやならない事がある。」

「君は、なんでその……abilityを使ってても意識があるので

？」

「俺の質問は無視か！？」

「ああ、ごめん相羽君。俺、あの時氣を失つて……いや、意識はあつたんだけど、体と心が離れてるような感覚だったからそれを聞き葉月が反応した。

「氣を失つた？そんな事、俺は一度も無かつたがな……それと、君はいらねえ」

なんだ、知らないのか。今度シュドウから聞いてみよう。

「葉月、で良い」

「じゃあ葉月……君はシュドウの組織の人間なのか？」

「ん、ああ……俺も良く分からぬ。シュドウの奴はビプロイツに狙われて死にかけた俺の前にいきなり現れて、俺を助けたと思つたら、俺にabilityの使い方を教えて、それつきりだ。俺に、お前は仲間だ。みたいな事を言つていたけどな……」

「なあ、じゃあabilityって何だ？」

「いきなりなれなれしくなつてるな……abilityについては俺も知らない。まあ、超高性能な“武器”でいいんじゃないかな？」

「武器……か、葉月のabilityは物を溶かす力があるのか？」

「ああそうだ。原子焼失の力がある」

「原子焼失！？」

「じゃあなんで液体が残るんだ？」

「そ、それは……」

葉月はしばらぐ頭を抱えて考えこんだ後、

「わからねえ」と答えた。

第十五話～プロローグ終結～（後書き）

今回はサブタイトル通り、プロローグ終結です。

今までの話はプロローグみたいな物だったので、本当は十四話で終結させても良かったのですが、五の倍数で終らせたかったので、無理矢理引き延ばしました。

これからはなるべくテンポ良く進めて行きたいと思います。

第十六話 出会いと襲撃、そして後悔

「行つてきま～す」

弥彦がいつもの様に家を出る。あの戦いの後、葉月と暫く話、それからは何も無かった。だからいつも通り学校へ向かう。

そういうえば、もうすぐ夏休みだなあ……今年は色々疲れたからゆっくり休みたいな……

そんな事を考えながら弥彦が学校へ着くと、なにやら騒がしい。騒ぎの中心になっている所へ弥彦も行つてみる。正門の直ぐ近くに生徒達が輪を作っている。それを押し退け前に出るのは一苦労だ。

「はあっ、やつと前に来れた……て、ぐわあっ！」

前に出た瞬間、弥彦に人が飛ばされて来た。

「つっ」

弥彦は飛ばされて来た人物の顔を見る。坊主頭にソリを入れていて眉毛も無く、制服をボロボロにしているその姿はどう見ても不良だ。しかしその不良は鼻血を吹き出し、前歯が折れていて、泡を吹いている。

既にやられているのだ。

「コイツは確か三年の学校で一番強いと噂されている徳間^{トクマ}元か^{ゲンカ}……」

「コイツをぶつとばすなんて一体誰が……」

と、その瞬間脳裏にある人物の姿が浮かび上がる。

「自分から喧嘩を売つておいてもう終りか？」

聞いた事のある声。

「葉月……」

「よお、弥彦」

葉月は何事も無かつたかのように弥彦に話かける。

その後継を見て周りを囲んでいた生徒達は絶句する。それもそのはず、クラスで一番暗く不気味な雰囲気をかもしだす弥彦と、三年生を軽くあしらう強さを持つイケメン不良転校生葉月が仲良く話しているのだ。

と、弥彦はその視線に直ぐ様気付いた。

ああ～！やばい注目浴びちゃってるよ……確かにこのパンジーは異色かもしないよな……

「うわ～」

弥彦は突如何かの突進により吹っ飛ばされる。『何か』とは女子の群れだ。その中には二年生だけで無く、一年生や、三年生の女子も交じっている。

「うおお…凄い人氣だな葉月」

弥彦は独り寂しく、背中に哀愁を漂わせながら歩いて行く。その姿はさながらリストラされたオッサンの様だ。

弥彦が教室へ向かうべく学校の廊下を歩いていると、一人の少女と肩をかすめる。

「あ、すいません」

相手の顔も見ずに弥彦は直ぐに頭を下げ謝った。しかし、返事が返つて来ない。弥彦は頭を上げてみると……

少女は弥彦を無視し歩いていた。

「んだよアイツ……態度悪いなあ」

その少女は茶髪で背が高いモデルの様な体型ながら、後ろ姿から確認出来た。良く見ると周りにいる男子達がコソコソと何かを話している。

「やつぱは“宮城”さんは可愛いよな」

「いや、寧ろ美しい！」

「いや、寧ろ萌える……」

「いや（→）」

なんだ？やつぱ人気なのか……でもやつぱり人は中身だよなあ、ぶつかつといて謝罪の一いつも無しに行っちゃうなんて……忙しかったのか？

「でも宮城さんの魅力はある冷めた性格だよな」

「いやあ～もうちょと優しい方が可愛いと思つよ。なんかトゲトゲしいんだよな、言動とか」

「馬鹿が一きつとツンデレなんだ、やはり萌える……」

なんとなくどんな人物なのか想像出来た。ま、顔は普通で良いから優しい子が俺は好きさ

……なんて人を選べる人間じゃないな、俺は

教室に入り自分の席に着く、暫くすると先生が入つて來た。HRの始まりだ。先生が話を始めると遅刻して遅刻して葉月が教室に入つて來る。何やら制服がよれよれになつていて、女子達にもみくちやにされた様子だ。

女子、恐るべし！

「遅いぞ相羽！」

先生が注意する。

「うつせえんだよ先公が！」

不良の代名詞の様な台詞を吐き葉月は席に着く……俺の横の席に

……
先生は口を開けて暫くポカーンとしていたが、気を取り直し話を
続けた。

夏休みまで後四日だそうだ。

H.Rの後、俺は教室を出て別のクラスに向かった。親友、太四郎
のいるクラスだ……しかし

「え、高橋？ 今日も来てないよ」

クラスの人聞いてみたところ、太四郎は学校に来ていないう
だ。一日来ていない……普通は風邪かなんかだと思うのが普通だが、
弥彦は深く考える。

太四郎が風邪をひいた事は今まで一度も無かつた。それに入当た
りが良く皆に慕われ、責任感や正義感の強い太四郎の事だ、虧めや
不登校なんて事は無いだろう。

何かあつたのか？ 今日は帰りに太四郎の家に寄ることに決めた。

学校が終わり弥彦は太四郎の家に行こうとした。

「弥彦！」

何かが弥彦を引き止める。葉月だ。

「なんだよ？ 僕今日行くとこあるんだけど」

「何だよ、用事あんのか……じゃあいいや。またな、殺されるなよ。
葉月は笑いながら言つたが笑い事じやない。

葉月の家は学校から30分程度だ、弥彦はゆっくりと歩いて行く。

太四郎の家に着いた、インター ホンを押すと太四郎が出てきた。
親は今出かけていていないので「」

「ああ、弥彦」

「太四郎どうしたんだ？ 学校来てないけど」

「ん、ちょっと風邪ひいちやつて」

「お前が！？ 珍しいなあ」

「うん、生まれて初めて風邪をひいたよ。あ、御見舞いに来てくれて悪いけどまた今度ね……薬のせいで眠くて……」

「そうか、じゃお大事に」

普通だった。ちょっと元気が無かつたが、気にする程の事でも無いだろう。

帰りに寄り道することに決めた。何処へ行くかは決めて無いが、
とりあえず何処かへ行きたい。時々こいつは衝動に駆られるのはゲームや漫画のせいだろうか？

弥彦は電車に乗り、少し田舎チックな場所へ降りた。自分の家から三駅しか通つて無いのに、雰囲気がまるで違う。

いつもと違う場所に行くと何故かワクワクする。弥彦は人通りの少ない路地を歩いた。狭い道だが車も少なく、歩くには最適だ。だんだんと太陽が落ちてきて星が見えて来る。そろそろ帰ろうか？ そう思つた矢先、後ろから気配を感じる。

確實に付いて来ている。

まさか……弥彦は思った。

そして、予想は的中する。

弥彦は後ろを振り向く。すると後ろから紫のコーナーをはおった男三人が現れる。

またか！やつぱ寄り道なんかしなきやよかつたあああ！

後悔後に立たず……そんな言葉あつたかな？

「なんですか？」

弥彦はビクビクしながらも尋ねる。

しかし男は答えなかつた。かわりにポケットに手を突つ込み、拳銃を取り出す。

そして弥彦にめがけ発砲する。サブレッサーを付けているのが、発砲の発砲時の音は空気が抜けるような音だつた。

反射的に体をくねらせ、弥彦は弾をかわした、男はそれに対し舌打ちをする。

「やはり拳銃では……」

「仕方がないだろうこんな町中では」

「うるさい、俺は一撃で殺したかつたんだ！」

「奴はabilit yだ。拳銃じゃ当たつたとしても殺せないぞ」

なんなんだあの連中は？ビプロイツなのか…それにしてもいつもと雰囲気が違うような…とりあえず銃を持ってるんだ、今は逃げないと。

「逃がすか！」

男は銃を撃ち弥彦の道を遮る。

「うわあつ」

「貰つた」

弥彦が戸惑つてゐる瞬間に、もう一人の男が弥彦に接近し、蹴りを浴びせる。

「痛つ」

蹴りを放つた男は、弥彦が吹き飛び、地面に着く直前に銃を撃ち追撃を加える。

しかし、弥彦は空中で地面に手を付き、手で地面を押し返し翔び上がり銃弾を避ける。

「なんだとー?」

地面に着地した弥彦は呟いた。

『そんな玩具で我を殺す氣か?笑止!』

弥彦、否ティアボロスがそう言い、右腕を変化させる。ティアボロスは変化した右腕を見て不気味に笑う。

「ぐ、やはりティアボロスが現れたか……ビブロイツとの戦いで秋草弥彦は命の危機が迫るとティアボロスが現れると分かつていたが……本当だつたか」

「こうなることは分かつてゐた。これより目標を抹殺する」「了解」

男達は両手に銃を構え発砲していく。

しかしティアボロスは右腕を盾にして、銃撃をかわしながら接近する。男達は散開し三方向から銃撃を見舞う。

『「いやかしい』

一人の男に狙いを付け、右腕を伸ばし捕えようとする。

男は銃をしまい、剣を取り出した。迫るディアボロスの腕に剣をぶつける。しかし剣はディアボロスの腕に弾かれてしまう、しかし、その衝撃で男は迫る腕をかわす。

その間に他の一人が隙だらけのディアボロスを銃で攻撃する。しかし、生身の部分に当たっているはずなのに、弾が当たって出血はするが直ぐに再生してしまう。

「なんだと！？どうなっているんだ」

「分からない…が、銃は効かないと言つ」とは分かった

ディアボロスが腕を戻そうとすると、ターゲットにした男が腕よりも速い速度で、ディアボロスに接近し、同時に飛び膝蹴りを顔面に『』える。

怯んだディアボロスに他の一人が銃で援護し、再び三人が固まる。

動きの止まつたディアボロスを見て三人の男はマガジンを取り替える。

『汝ら、我に爪を立てた事、後悔するがいい』

不気味に口元を歪めディアボロスは三人の男を睨んだ。

第十六話 出会いと襲撃、そして後悔（後書き）

今回は久々に長い話ですね。

とりあえず気分的にはプロローグが終了して、気合を入れてる状態です。

では、感想御意見などお待ちしております。

PS・エアガンのサブレッサーは全然消音効果がありませんね（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951a/>

～DESTINYブレイド～

2010年10月9日23時38分発行